

山と博物館

第4巻 第6号 夏山特集号 1959年6月25日



夏山開きに先がけ、日本アルプス開拓者としての業跡をたたえて毎年上高地では、岳界の有名人が参列してウエストン祭が行なわれる
(1959. 6. 6)

大町山岳博物館

針の木峠雑談

百瀬 慎太郎

昭和のはじめ頃の初夏だった。私は針の木峠に小屋敷地借地の希望を持って越中富山の営林署を訪ねた。「国有林はみだりに借地の許可をしないのが原則である」と云うので取り付く島もなく、一応此処に山小屋が必要なる事。信州方面からが最寄が良い点で是非御許可願いたい旨を申述べて引下った。

何か充たされない失望を覚えて淋しい気持ちになると俄かに人恋しさが強くなり、ふと思いついたのがこの時滑川の水産学校に、蜚鳥賊の研究に出張されていた石川博士（千代松先生）の事だった。早速富山から汽車で滑川駅に行き、海岸の学校まで一里弱をバスで御訪ねしたのだった。埃っぽい試験場で顕微鏡を窺っておられた慈父の如き温顔の先生にお会いすることが出来た。

「恰度これから午饭に宿へ帰るところだから一諸に行こう」と言はれて、再びバスで滑川の町の清水館というのえお供した。広く松の樹林をとり入れた庭に面した一室を開け放して初夏の涼風を嬉しみながら、盛に先生のついで下さるビールに、スッカリ悦んでしまった。

先生の雑談の中には必ず、ワイズマン先生とか、ゴールドシミュットとかいう名が出るのであるが、国際的というよりも国境のない先生の知己や友人には当然動物学者や昆虫学者が多かった。それ等の人々を思い出しては物語のお話は如何にも懐しそうで、友情に溢れたお話ぶりが聞く者を全く楽しくさせてしまうのである。私には学問の話は縁が遠いのであるが先生に面接していると、文字通り慈父という気持ちが一ぱいになったものである。

そこで私は、山小屋の事で営林署に罷り出て突っ放された愚痴を申し述べたところ「欣一が大阪毎々にいるから、大阪営林局の方へ一度うかがはせたらどうかなるでしょう」と云うお言葉に大いに慰められてその夜は、病を得てドイツから帰った柏崎の与口文次郎氏を訪ね、山の思い出話や山階節や、酒やで4、5日を過ぎてしまった

その後石川欣一氏が大阪営林局の吉江さんにお話し下さったと思う。吉江さんは吉江孤雁先生の令弟である。孤雁先生は令閨が北安曇郡小谷の方だったので、時折この地えも来られた関係で、二度程お目にかかる事が出来たのも、私の若い時の思い出であるが、その頃、姫川の谷とか山清路などの小品を集めた「高原」という本は、私達が限りなく愛読したものであった。

話は充分それだが、とにかく私の希望が実現して針の



針ノ木大雪渓

木峠に、さゝやかな小屋を建てる事が出来たのはこの様な因縁があったのである。

○

その針の木小屋も戦争中閉じた儘の数年間に大分荒廃したらしいので、この登山季節に是非見に行かねばならぬと思ひながら、つい針の木峠の連想が、それからそれへと回想の過去に引き込まれて、毎々晴れた山の姿を見つめては茫然日を過しつつあるのである。

山を想えば人恋し、人を想えば山恋し。童謡ならぬ老謡を口吟みながら、我ながらいつまでも抜けきらない老センチメンタリストを自分に発見するのである。人と人その交錯の相をちっと見せつけられて来た自分である。

初めて針の木峠に立ったのは、黒部の品エ門とその長男作十郎との三人づれだった。十九の年の初雪の時であった。最初だけに忘れられない印象である。

白沢から上は道らしい路もない沢伝いであったが、所々明治の初年の加賀街道の名残りの痕跡が、溪の左岸に残っていた。峠の上に立った気持ちは寂寥そのものであった。その寂しさが他では味わえない魅力の様に思われた。

「私はヒストリーのない国に行き度いのである。荒れて廃れて、人間がその上に作った歴史の頁がズタズタに裂かれて打っちゃられた処を、私は針の木に見出そうとしたのである」とかつて長谷川如是閑氏が書かれたが、明治四年から八年にかかって開鑿された加賀街道又は針の木新道も、明治十三年頃までの寿命であった。

ウェストン氏が来られたのは1893年とあるから、それは私が2、3才の頃だったのであろう。その後15、6年

の後に私がウェストン氏に会う事が出来たのも、山につながる不思議な因縁といえよう。木暮理太郎氏が初めて針の木を越えたのが明治25年というと恰度私の生れた年の事である。この頃から所謂近代登山的傾向が生れて来たのではないだろうか。「悪絶險絶天下無比」というのがチャムバレン氏の言葉だと一これは名翻譯家が誰であるか知らぬが一これが末期の針の木峠の標語であった。

つい此頃(5月末)、35年ぶりだったと言って私を訪ねて来られた広島県呉市の高校長泰四郎氏は、大正2年に初めて私が八峯を通過した時の相棒である。此の時は針の木を起点として大黒岳まで、それから平川の雪渓を降りて四ツ屋に辿りついたのであったが、その時の案内菊十、国作、林蔵の三人とも今は亡くなった。此の行鹿島槍までおなじ私の天幕に入っていたアレキサンドル、ゲーセフというロシア人も、今は生きていのかどうかなどと思出す。大正10年には朝香の宮様が針の木峠を越えて立山、剣、八方と11日間の長山旅をされた。

大正3年に私は初めて立山、剣に行った。その時の同行は八代準氏、伴野清氏、大島永明氏だった。みんな偉い人になってその中の二人は今の追放組だと思つと今昔の感がある。

私がまだ宿屋稼業を廃めない前、土蔵の古簞笥から見つけたのであるが、桐の小箱に一片の鷹の羽が入れてあって、それには、

○天保12丑年6月4日5ツ時越中立山參詣之節鷹之羽半分得拾往々随分大切に可致者也

行年67才 百瀬和平

という書付と、立山大宮供諸願成就祈所と刷ったお札が添えてある。数蔵坊と記されてあるのを見ると、この数蔵坊が信州方面からの信者の斡旋をやっていたものらしい。私には曾祖父にあたる和平という老人が、当時この針の木峠の難路を経て立山に登ったのかと思うと、又も妙な因縁を覚える。私の父は72才で峠が作った針の木小屋に初めて泊って蓮華頂上を極めた時「山はやっぱりいいもんだなあ」と云った。

越中から平蔵と2人でこゝを越したのは或る年の5月だったが、立山でその時慶応の早川種三氏や大島亮吉氏等に雪の室堂でお会いした。名古屋の伊藤孝一氏と、赤治千尋君と一諸に大袈裟な雪の立山針の木越をやったのは大正12年の2月3日だった。此の年五色ヶ原、平の小屋に大毎が建設した山小屋を北尾鐮之助氏と見に行つて帰つたら、丁度あの関東の大震災で、私は山から背負つて来た残りの缶詰が入つたままのリックを担いで東京へ飛んだ。

石川欣一氏と大正15年6月の針の木越えは楽しかった平小屋附近の薄紫のカタクリの花、立山温泉の独活の汁と、桜正宗の味も忘れない。まだ峠の小屋のない時だつ

た。小屋が出来てから石川氏は英人リチャーズ夫妻を案内してやって来た。石川氏と針の木峠との縁はやがて私と石川氏の縁でもある。石川氏の効かった子供2人を伴つて針の木に登つた時久爾宮様3人姉弟が小屋にお泊りになった。

この時は徳高で亡くなった茨木画伯も一諸だった。交友37年、私は今も手元にある故画伯のスケッチ帳を出しては眺めるのである。

○

針の木峠の事を考えたりそれにつながる人、人、人の事を想うと果てしが無い。

もしも、私が天正年間の人間であつて、かりに針の木小屋の番人をしていたとする。天正12年霜月23日深雪を踏んで密かに此の天険を信州へ越そうとする佐々成政の一行をここに迎えて、鉢の木もどきのサービスをしたとする。

成政大いに悦んで、

「ここに携えし7つの瓶の黄金は余が軍用金ぢやが内1個を汝にとらすぞ。他の6つの瓶は隠匿物資として秘蔵すべし。ゆめ人に知らぬべからず」という様な事にもなつたかも知れないのである。

ああ今この小判の瓶があつたら、壊れかかった針の木の小屋も立派に改築出来るのだからなア、と深い吐息を洩らすのである。

(昭和23年7月)

山を恋ひ
人も恋ひ
山は得行かば
人も恋ひ
山は得行かば
人も恋ひ
山は得行かば
人も恋ひ

百瀬氏筆

スバリ岳 西面登攀

大塚一郎

概要

後立山連峯の南端に土地の人達が屏風と呼んでいる一連の山脈があります。爺、岩小屋、鳴沢と続きスバリ、針ノ木と連って居ります。スバリ岳は標高2740m僅かに峠を越す人達が縦走者のみに知られております。この閉鎖だった山々にも今では黒四工事のハッパの音が響いて来るようになりました。私達は快適な登攀の対象となり得るスバリ岳西尾根を、山溪171号及び過去数回の経験からその概要を紹介し、後立山での得難いブロンナードとして心ある人達の興味の対象になればと考えております。「剣のハツ峯や源次郎のリッチを行く時、何時も感じる優松やヤブの嫌味もなく、全く気持の好いクライムを味わうことが出来て、見掛け倒れの失望はない」と初登攀された京大の藤田氏の記されている如くスケールこそ穂高や鹿島槍のように大きくもなく、纏まってもいませんが、何時訪れても楽しい山行をすることが出来ました。

根拠地は大沢小屋かその附近に幕営するのが良いと思います。全り欲張った計画を持たなければマヤクボのカールより参加人員、炊事の関連からみて楽しい生活が送れると思います。登路はマヤクボの雪溪かスバリ頂上北寄り第三尾根辺に直登するのが時間的に適当と考えます。この沢は相当荒れておりますが踏跡らしいものもあり仲々便利です。降路はマヤクボをグリセードするに限りません。

スバリ岳西尾根には主稜、中尾根、第三尾根がありますがそのいずれも北面は傾斜が緩く、南面は圧倒的に切れております。岩質は全般に硬く指先が痛くなる程です。そして余り人が入らぬ為大きな岩が動く事がありますので用心に如くはありません。

主稜

ルート

大スバリ頂上から主稜と中尾根の中間ルンゼを落石に注意して下る。中尾根Ⅲ峯南面の岩壁や主稜西北の奇怪な岩壁に威圧され、やりきれない気分になる頃Ⅲ峯から出ているリッチを藪こぎしてⅢⅢのゴルに着くⅢ峯取付でアンザイレン岩は硬く地形は稍複雑だがルートは拘束されず足馴しに好適です。Ⅲ峯を越えたと広場がありここでⅢ峯をゆっくり観察する。中尾根、西北稜の眺めが素適な所です。Ⅲ峯はノードル群を登るか側面フェイスを採るか思案のしどころです。Ⅲ峯南面のバットレスを眺めノードルに跨ってジツフェルしていると、剣が見守って呉れます。小スバリで優松の味をかきながら昼寝をしたら、山人の主題でも聴いているような満ち

足りた気持になれました。

タイム 昭和30年9月 主稜登攀

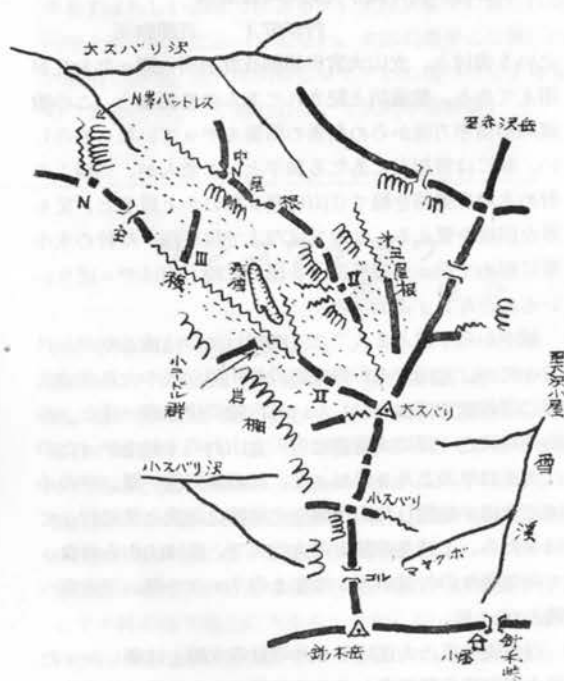
大沢小屋6.15-ゴル8.20-大スバリ頂上9.00-ⅢⅢのゴル10.15-Ⅲ峯12.50-大スバリ頂上1.05-小スバリ屋裏して発2.30-大沢小屋3.50

主稜Ⅲ峯バットレス

勝手知った中間ルンゼを下ってⅢ峯バットレス基部まで少し藪こぎする。正面から仰ぐ左右の壁はオーバーハングに近い垂直な壁で中央に稍傾斜の緩くなったフェイスがある。私達は中央フェイス左寄りに取付いた。暗い湿った逆層で初めから間違つく。左のハングまで斜め慎重にザイルが延びる。ホールドは細かく二ピッチでアンカレッジに立つ、次に右斜め一ピッチ適当なピンが打てず緊張ものだ。上のレτζもやっと一人立てる程度でセルフビレーする。此処から気分余裕も出来て右斜めグツシュまで不安定なピッチが続く。あとはⅢ峯頂上まで殆んど藪のない硬い岩を楽しんだ(約2時間)

中尾根

主稜ⅢⅢのゴルやⅢ峯から眺めた中尾根南面バットレスはスケールも相当あり、特にⅢ峯フランケは人を寄せつけぬ面構えで削ぎ落ちている。私達はⅢ峯で面壁を敬遠してⅢ峯のすぐ上に出たが、取付からキツイ傾斜で聯か胆を冷した。ホールドも細かく適当なアンカーが出来ず30mスライディングミドルマンでは窮屈な思いをした事を記憶している。(約2時間)



スバリ岳西面概念図

第三尾根

この尾根は稜線から幾分下った所で優柔の岩稜を見せるスケールが小さくその存在価値は余り認められないが、トレーニングの場所として私達はここに集う。中尾根、第三尾根の中間ルンゼを下って尾根末端から取付けは非常に楽しみな登攀になります。そして南面のフランケは相当に手強く、主稜西北稜と共にその価値は貴重なものと考えております。(約1時間半)

まとめ私達の登った幾つかのルート以外に考えられるものは、中尾根峯Ⅲフランケ、主稜Ⅲ峯左右壁、主稜Ⅱ峯南西パットレスなどがありますが、いずれも登度感があり技術も要求されるものと思います。ともあれ私達を此の上なく楽しませて呉れたこの隠れた岩場の存在を私達に教えて呉れた、吉田二郎氏に深く感謝すると共に、今后尚一層多くの人達に親んで戴きたいと念じております
(呉羽紡績大町工場山岳部)

シーズンが近づけば、どこの山小屋もいそがしい。寝具、食料、燃料など期間中差支ないよう準備しなければならぬ。時にはシーズン外に心なき利用者にずい分荒され、修理や補給にひと苦勞させられる事もある。

3・4年前のことである。私はそれらの手伝のため45日冷小屋に働いたことがあった。シーズンに入ったばかりで客はせいぜい5・6人程の或る日のことである。仕事もすんでまず一服というとき3・4人の客が入ってきた。聞けば鹿島の頂上で疲れ切

った男女の二組がこちらへ向ってきているとの事しかも運動靴のハイキング服装時計を見れば

七時半をまわっている。この日は午後から深い霧が立ちこめ3・4メートル先は全く視界がきかない。やがて夕闇がせまるといふのにノ山頂は日没とともに急に温度が降る時には厳冬を思わせるような寒波に襲われることもある。私は捨てておけないと思って小屋をとびだした。霧の中を三十分ほど強行して気はいを伺ったあたりは静まり返って物音一つしない。冷たい霧が頬をかすめる雫となって顔をつたって流れる。

遭難は必ずしも危険なところにおこるとは限らない

最も安全な場所といわれている表銀座裏銀座などでも一歩誤れば千じんの谷、命がいくつあってもたまらない。そのような場所の連続といってもいい。鹿島といってもその例にもれるものでない。ことに荒天や夜間の強行はその道のベテランでも避けるのが常識である

それがハイキング姿の初心者らしいアベックがこの濃霧の中しかも足元から夕闇がせまってくる中を疲労の体を運ぶことは実に危険の上ない。もしや、とい

う気もちが私の脳裏をかすめた。とたんに全身寒けをもようした。出来る限り息を吸い込み大声を

或る日の山小屋

星野 貢

はりあげヤッホーと呼んだ。それと同時に足元からキャットという女の悲鳴に総身の毛がよだつほどびっくりした。話すところによれば二人は疲労と空腹寒気、その上忍びよる夕闇しかもこの濃霧三拍子も四拍子も揃った悪条件に極度の不安におびえつつ蟻のはうようにして前進してきたのであった。こちらの懐中電燈の信号も濃霧のため全然用をなさずお互ぶつかり合うまで分らなかつたので、2人ことに女性の驚きは暫くは口もきけないほどであった。(大町市山案内人)

(自)(然)(に)(親)(し)(む)

「山の自然科学教室」が7月21日～25日東京の各中学生約200人が参加して行われる。顧問の先生方ならびに教育大野外研究同好会、大町山岳博物館学芸員ら約50名が引率、指導にあたる。

山岳博物館見学、仁科三湖の観察、八方登山が予定されている。

八方尾根はチングルマ、ミヤマムラサキ、ユキワリソウ、ムシトリスミレなどが乱れ咲き、クモマベニヒカゲベニヒカゲなどの高山蝶が飛び、白馬三山、鹿島連峯などが間近に見え、八方池にはクロサンショウウオがすみ自然観察にはもってこいの場所である。

山岳、昆虫、両棲類、鳥類、植物など担当者の説明が大自然のふところで行われ、澄んだ山の空気を心ゆくまで満喫しようというのである。

「博物館友の会」は会員約160名で4月より自然観察の会が毎月催されている。会員には大町市内の小中学生(小学生4年以上)が中心になっており、そのほか一般市民も参加して行なわれている。

◎ 佐野坂付近の自然観察会 分水嶺佐野坂の植物、神城付近のヒメギフチョウ、湿原の両棲類などの観察。

◎ 山菜採集会 ワラビ、コゴミ、ゼンマイなど食用野草の採集会。

◎ 探鳥会 居谷里湿原に棲む野鳥50数種について実際に声を聞き、博物館でレコードを使用

しての復習。

◎ 鹿島、黒沢をたずねる、ギフ、ヒメギフチョウの混棲地の観察。

◎ 南小谷部落の植物採集会 北安理科同好会の先生方との観察を終り、駅付近にて化石を採集。などが今まで催され、岩石採集会、土器採集会などが予定されている。

私の好きな太郎兵衛平

平 林 武 夫



針の木峠を下って黒部の平で岩魚の塩焼きを味い、又ごそごと刈安峠を登りつめると五色ヶ原、小舎のあざみがあざみの葉のテンブラを揚げて呉れる実にうまい。然しこのあざみ

の葉は小舎の入口の横のごみだめに繁っているやつで実によく肥えている。毎晩の泊客の小便がきいているせいであろう。あざみのテンブラに勢をつけてスゴ-乗越へ向う。左に黒部の源流を見下ろしはるかに信州の山々が烏帽子岳は烏帽子岳らしく、鹿島槍は鹿島槍らしい双峰をあらわしている。右手は前山の桑崎山をへだて、越中の平があらほらす。担々たる芝の高原から樅の林をくぐる迄にスゴ-乗越の小舎がある。最近はどうなっているかその頃は極めて素朴な山小舎であった。小舎を出てからゆるやかな登り道、信州側の方には槍が鋭峰をあらわして来る。然し穂高も槍も雪の見えないのが淋しい景観である。

ひよっと頭をあげると薬師岳の峰が蒼空にくっきり浮ぶいよいよ道は薬師岳の肩を登る針の木峠から赤牛をみて薬師岳と間違える人もあるようだが薬師岳の眺められるのは蓮華岳の尾根へ出るか針の木岳の尾根へ出ないと眺められない。ここから眺めた薬師岳のカルは実に素晴らしいもので私はいつもこのカルをお内裏様の頭をかざるようらくにたとえている大体三段のカルになって

いる。今上から見下ろすとモレーンが二段実に標式的な形である。頂上に薬師三尊(中は鏡)が祭ってある。薬師の峰から見下ろした南面の高原と云うか。高台と云うか、ゆるやかな線とふんわりした芝生、そして所々に点任する池、池の周りを飾るはい松の群生、その配置の妙を得た美しさは何とも云えない美しい高原である。その名は太郎兵衛平。一体太郎兵衛平なんて名は誰が呼び初めたのであろうか、太郎兵衛氏が発見したのか、或いは太郎兵衛氏がこの高原にでも住んでいたのか、或いは又太郎兵衛氏がここで遭難でもしたのか、とにかくそんなせんぎはどうでもよい。この広莫たる太郎兵衛平に寝転んで去来する雲を眺め吹きあてる山のそよ風を肌に快く感じ乍ら本当に山に来たと云う感じを深く深く味う。

左下の黒部の源流はすっかり細くなって薬師沢や赤木沢が黒部へ合流する辺りに幾分の波頭が見える。この合流点あたりは岩魚の釣れる所で昔は塩がますを背負って1日に一かます。これを焼くのに2日、又一かます、焼きほすのが2日と云う勘定で岩魚つりはこの辺を根じろに釣ったと云う話をきいたが今は果してどうだろうか? 黒部をへだててすぐ目の先に雲の平が見える。この雲の平もすばらしい高原ではあるが、太郎兵衛平に見られる円味と軟か味は比ぶべくもない。太郎兵衛平とは実にいい名前である。先人は山にじっくりした名づけをするものであるとつくづく感心した。(大町中学校長)



サンコウチヨウとは「三光鳥」と書き「三光」即ち月日星の三つの光という意味である。この立派な名前の由来はその美声から来ている。その鳴き声はツキヒホシ、ホイホイホイと朗らかに鳴く。ツキヒホシは「月日星」即ち三光である。又鳴き声の後半のホイホイホイと鳴く声からウマオイドリまたはウシホイと言う地方もある。鳴

サンコウチヨウ

長 沢 修 介

き声も美声なら姿は尚美しい。

頭がビロード黒色、背は紫栗色、腹が白色で目の周り、嘴、脚の蒼いのが良く目立ち、雄は体長の二倍にもおよぶ長い尾を持っている。この尾は年年のびてゆき年を取った鳥ほど長く250mmから320mmにもおよぶ。

低山帯の木の繁った所に蕃殖し、巢は盃形で梢の方の細い枝が二三本又になった処に作り外側はウメノキゴケを附着させて下から見ても解らない様な巧妙な巢を作るヒタキ科の鳥で地上に下りることなく長い尾を林間にひらひらさせながら昆虫類やクモを食べている姿はまったく美しく、英名の「日本の極楽ヒタキ」という名にふさわしい。



独標より槍ヶ岳

槍ヶ岳北鎌尾根

昭電大町工場山岳部 富 樫 稔 門

待場と云われている千天の出合から天上沢に入る。草の多い爪先登りの道が沢を右に左に渡り乍ら続く。待場から一時間位進むともみの森林帯に入る。このあたりは沢も広くなり次第に視界も開けて来る。天上沢を逆上る事約一時間半で森林帯が切れ広い河原に出る。こゝが北鎌沢の出合である。右上新高北鎌尾根の独立標高点が望まれ北鎌尾根の偉容が見られる。北鎌尾根を登る時は第一目には是非共こゝ迄入らなければならぬ。出合の三百米位上流の天上沢の左岸に天上沢のヒュッテがありこゝに泊るか或いは出合附近で幕営するのも良いと思う。もう一つ大切な事は天候である北鎌尾根は非常に岩がもろく各所に浮石が沢山あり然も相当なやせ尾根であるので雨や風の強い時は絶対にさげなければならない。北鎌沢の出合から北鎌沢をつめ稜線に出て天狗の腰掛、独標を経て北鎌平槍ヶ岳へと行くルートが現在一番一般的であり余り高度の技術要求しない少し岩の心得のある人なら誰でもが行けるルートであるのでこゝでは夏山でのこのコースについての概略を記しこれから登られる人々の為の参考に供し度いと思う。北鎌沢の出合から約20分位沢をつめると右股と左股とに別れる。こゝで水と別れるので充分水を補充していく事を忘れてはならない。ルートは右股に入りルンゼ状の沢を登る。途中落石の危険が相当あるので注意しなければならない。稜線近くなると相当な急坂となり草付の鉄砲道であるのでビムラム靴では一寸苦勞する。この沢の遡行は約一時間半で稜線に出られる。稜線附近は這松と樽とが交生しており高山植物も美しい場所である。踏跡を辿って稜線を進むと天狗の

腰掛が間近くその彼方に独標の岩壁が望見される。このあたりは60度近い急坂であるが這松が密生しているのでその技や根が恰好なホールドになり案外簡単に登れる。天狗の腰掛から本格的な岩稜となり大小のピークを乗越えて約10分で独標の基部に着く。独標は正面ルートと千丈側へのトラバースのルートとがあるので岩登りに自信の無い人は後者を選ぶとよいと思う。然し一ヶ所オーバーハングの岩の下をトラバースする処があるので荷物の大きい時は人と荷物を別々に渡さなければ危険である。独標の正面には四本のチムニーがあるが最も一般的に登るのは壁に向かって左から二番目のチムニーである。あらかじめルートをよく観察してルートを誤らない様に記憶

して登る事は常識であるが念の為申し添える。基部からの取付は二米位のオーバーハングした岩を乗越すのに一苦勞する。ハーケンを打つのが良策であろう。この岩を登ると一寸した草付がありその上に約10米位の細いチムニーがのびている。このチムニーへ入る処が又オーバーハングしていて相当苦勞する。左側の壁にハーケンが打てるのでこの壁にハーケンを一本打ってスタンスとして登るのが良いと思う、チムニーの底には浮石が多いのでトップは特に細心の注意が必要である。このチムニーを登り切ると恰好なテラスがありここで確保するには最適な場所である。チムニーを出たすぐ右に直径一米位の窓があるのでこの窓をもぐって出ればガラ場があり急坂な草付が頂上に続いている。基部から約30分位で2907米の独立標高点の頂上に立つ事が出来る。独標の頂上に立てば槍ヶ岳は益々高く頭上に迫りその偉容は東洋のマッターホルンの名に恥じざる姿である。そしてこの北鎌尾根がそのツムット山稜になぞらえられるのもうなづける気がする。独標から北鎌平迄は約2時間大小の岩峯をいくつか越える。浮石が多いやせ尾根である。北鎌平は大きな岩の推積地で槍の肩に相当する処で槍の穂先が頭上にのしかかる如く見上げられ威圧さえ感ずる。北鎌平から穂先に向かってガラ場を登り穂先の東側即ち天上側を登るが岩質の固いチムニーを登りホールドの確かな岩壁を登ると約30分で槍ヶ岳頂上のお宮の処へ顔を出す。1日の悪戦苦闘が報いられ踏破した喜びに各峯々を見下し乍ら岳人だけが味える喜びと感激に固い固い握手をするであろう。

雪を
彩る

氷雪植物について 4

長野県白馬高等学校教諭 小野貞雄

これに対し *Oocystis lacustris* f. *nivalis* (第16図) や、*Chodoella brevispina* (第17図) 及び *Chionaster nivalis* (第5図) 等の氷雪植物は紫外線を防ぐ色素を持っておりませんから、強い光線の当る雪渓には発生出来ず森林内の日陰や、暗い谷間等の非常に光線の弱い雪渓に繁殖致しております。

このように光線による着色雪の色は、氷雪植物細胞内のフラボン系色素の消長と深い関係があります。この事実を確かめるものとして、筆者が観察した2、3の例を上げて見ましょう。

①雨飾及び猿倉のブナ林内のやや光線の強く当る雪渓に第18図のような赤雪と緑雪の二層からなる珍らしい着色雪をしばしば観察します。光線の当る上層部2~3cmの所には、第19図に見られるように赤褐色の色素を含有した *Chlamydomonas nivalis* と *Scotilla nivalis* からなる赤雪が発生します。光線の少ない下層部に於いては、第20図のように赤褐色の色素を欠き葉緑体のために緑色を呈した *Chlamydomonas nivalis*、*Scotilla nivalis* 及び、*Oocystis lacustris* f. *nivalis* から構成された緑雪が発生しております。又、赤雪の代に有機物や土砂にて汚れた雪の下にも同じ構成生物よりなる緑雪が発生しております。

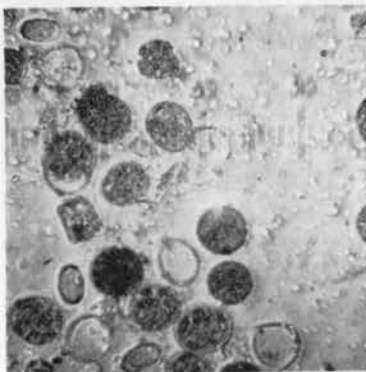
②白馬大雪渓に於ては6月頃までは *Chlamydomonas*



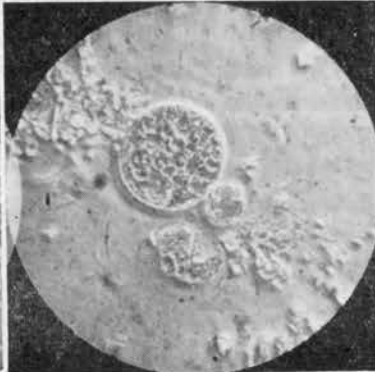
赤雪 緑雪 有機物

第18図 (a) 強い光線当る雪渓に発生する着色雪(断面)
(b) 赤雪と緑雪の二層よりなるもの
(c) 有機物や土砂の下に発生した緑雪

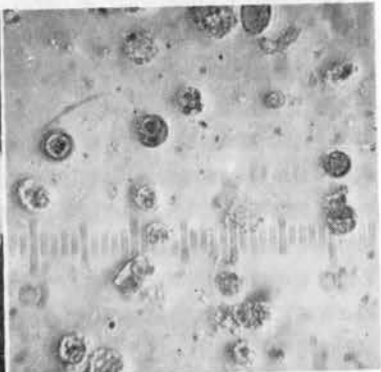
nivalis からなる赤雪が見出されますが、7月に入ると急に赤雪が影をひそめ、黄雪及び黄緑雪に変わり、大体9月上旬頃まで見られます。この原因としては、6月中旬頃より雪渓周囲の雪が溶け山肌が現われ、風雪により雪渓に土砂が流れ込んで極度に汚れて来ます。一方周囲の山肌にて温められた空気が雪渓のために冷され、霧が立ちこめるようになります。このように雪面が土砂の混入と霧のため、光線が遮ぎられ紫外線防止のヘマトクローム形成が不必要となり且つ葉緑体の形成も衰え黄緑雪(第14図参照)が、又第21図の如く葉緑体の外に含有していたキサントフィルが黄赤色の油脂を形成せしために、赤味を帯びた黄雪が発生したのではないかと思います。



第19図円形 *Chlamydomonas nivalis* (細胞にヘマトクロームを含む) 円形長方形は *Oocystis lacustris* f. *nivalis*



第20図円形 *Chlamydomonas nivalis* (細胞内にヘマトクロームのほかに葉緑体の現われているもの)



第21図黄雪を構成する *Chlamydomonas nivalis* (細胞内に黄赤色の油脂を含む) (1500X)

お願い 本紙の講読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第4巻第6号 1959年6月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上中町
信州印刷大町工場